

私は1937年(S12)日中戦争の始まった年に千葉市中央区院内、千葉神社の近くで生まれた。物心ついた時に、国民のくらしはすべて戦争に協力する体制となっていた。

血液型を記入した名札を胸に縫い付け院内国民学校(院内小)へ入学したのは1944年(S19)。すでに日本本土への空襲は本格化しており、少国民としての教育が徹底していた。校長室の並びにあった奉安殿には天皇、皇后の御真影が安置され、この前では必ず最敬礼をした。授業は「ススメ ススメ ヘイタイ ススメ」「チテチテタ トタテテタテタ」「ヒノマルノハタ バンザイ バンザイ」「ワタナベサンガ グンカン エヲ カキマシタ」。

私が描いた絵は小さな家と大きなチュウリップと太陽、そして戦闘機を描く軍国少女だった。歌ったのは「ぼくは軍人大好きよ いまに大きくなったなら勲章つけて剣下げてお馬に乗って ハイドウドウ」。

授業中、警戒警報のサイレン。間もなく空襲のサイレン。急いでノートや教科書をまとめ防空頭巾をかぶり、駆け足で校庭に集合。町内部落毎に6年生を班長として二列に並びわき目も振らず家路を急ぐ途中、B29の爆音が近づくと、その場で路上に伏せ、爆音が遠ざかるまで動かずにいた。

1年生の夏休み、市役所から父のもとに「赤紙」が届き、横須賀海兵団から佐世保の「震洋特別攻撃隊」へ。震洋艇といってもベニヤ板で作られたモーターボート状で爆薬を仕掛けて敵艦隊に体当たりする。これが秘密特攻兵器だった。そして中国の海南島へ。35歳の父は「必ず生きて日本の土を踏む」と5人の家族を思い決意していた。

6月10日の空襲は日立航空機工場を標的に蘇我1丁目。学校工場の県立千葉高女、千葉師範女子部、千葉鉄道機関区(現JR千葉駅)に爆弾が投下され391人の死傷者、415戸の罹災。

そして7月7日未明。午前1時39分から4時5分まで約2時間半、129機のB29により889t、14,200発の焼夷弾などが投下された。焼夷弾の量は東京大空襲のほぼ半分といわれている、焼夷弾は郊外の軍事施設から市街地へ。市民は逃げまどい、路上で家庭防空壕で、千葉神社や京成千葉駅(現中央公園)の防空壕、本町国民学校地下道などで多数焼死した。また火の海をくぐり、登戸、出州海岸、寒川地先海岸埋立地、都川上流に向かう避難の列が続いていた。

私自身も避難した1人。灯火管制で電球は黒い布で覆われた薄暗い部屋。空襲警報で起こされ、母は0歳の妹を背負い、5歳の弟と私を両手に避難。どの家からも続々と出てくるため狭い路地は避難民であふれ、人波に押し流され院内国民学校の通りに出た。学校はすでに燃えさかり家々は炎に包まれ、家々の骨組みが今にも焼け落ちるばかり、路上には命を落とした人が炎の明かりに照らされている。これらを避けながら院内国民学校裏(現祐光町住宅地)の田圃に。すでに多くの人でいっぱい。

恐怖の一夜を過ごし、人々は各自の家へ向かった。見渡す限りの焼野原。県庁、千葉銀行、三菱銀行（千葉市中央区役所に現存）以外はモノクローム、瓦礫の山。千葉神社の石堀とくすぶる本家の土蔵で我が家の位置を確かめた。吊るしてあった玉葱がむし焼きに、カメの中の大豆は炒り豆になっていた。井戸端にはカラの焼夷弾がころがっていた。隣のフジオちゃん（5歳）はお母さんと防空壕で焼け死んでいた。私たち親子はその日のうちに大学病院下の叔母の家に避難。手前の都川には多くの屍が折り重なる凄惨な光景を目の当たりにした。

この日の死傷者は1,204人。8,500戸の罹災。当時の人口95,000人の42%、40,000人が家を焼かれた。しかしこれらの数は調査母体により異なり、確定のための公的努力はなされていないと言われている、

叔母の家は焼け出された親類縁者でごった返し、西登戸の祖父方の親類も同様。まもなく母の里である東北へ疎開。空襲警報で汽車は何回も停車。こうして1週間位で国民学校へ転校。「東京から来た子」といじめられた。母の里といっても食卓は別。いとこたちは“こび”と言っておこげのお代わりをしている。

私たちは米粒と菜っ葉の浮く雑炊をすすり、0歳の妹は母乳が出ないので雑炊の汁を与えられていた。弟も私も“こび”を食べたいと言った記憶はない。この時代「やっかい者」だった。しかし叔母たちは決して悪い人ではない、その時の母親の気持ちはよく理解できる。8月15日は、ぬけるような青空。やがて祖父が「バラックを建てたので」と迎えに来た。

空襲のないくらしとはいえ、食糧難で飢えの毎日。農林1号とかオキナワという、不味いサツマイモが主食として配給。肥料用の海草や家畜の餌の澱粉カスの“ドンニクモチ”。学校給食の干しブドウや干しリンゴは大変なご馳走、空き地ほどの家も野菜を栽培した。

1946年（S21）3月。父も復員。我が家もようやく春になった。6帖一間のバラック建ての住い。ひもじく貧しい毎日でも、やがては平和な安定したくらしという希望を期待していた。

こうした空襲の体験を風化させてはならない、再びくり返してはならない。この思いは地方自治法の本旨である“平和と安全を守る”こと。その具体化としての平和行政を。私は市議会議員として平和資料館の設置を求めてきた。毎年、7月7日前後に各区役所等で「千葉空襲パネル展」が1987年（S62）より開催されている。

1989年（H1）2月、多くの市民運動で「千葉市平和都市宣言」が実現した、これは市独自の非核平和都市宣言を求める署名が10万筆。そして「ヒロシマ、ナガサキからのアピール」は県内80市町村長すべてが署名され24万筆を集めた。そして89年8月（H1）戦争体験記を市が発行。“千葉市空襲50周年の集い”95年（H7）には「平和都市記念像」（未来を支える人々）の設置。これは多くの市民運動が大きくかかわっている事を忘れてはならない。